

小学校・中学校におけるがんについての授業

—がんに対する基本的な知識を学び、

自らの健康を適切に管理できる子どもの育成を目指して—

健康教育研究会議

研究員 岸本 由香里（川崎市立宮内小学校）

三好 由紀子（川崎市立中原中学校）

寺島 さゆり（川崎市立宮前平中学校）

指導主事 木村 めぐみ

I 主題設定の理由

がんは日本の死因第1位であり、生涯のうち2人に1人ががんにかかる時代になった。そこで、学齢期からがんに対する正しい知識を身に付けることが課題とされている。学校では、健康の保持増進と疾病の予防といった観点から、がんの予防も含めた健康教育がなされているが、がんそのものについて理解を深める教育はまだ不十分な状況にある。文部科学省は「がんの教育総合支援事業」を立ち上げ、検討会を設置して各都道府県で行っている先進事例の分析・調査等を行うこととなった。学校教育全体の中でがんの教育を推進することにより、「がんに対する正しい理解とがん患者に対する正しい認識及び命の大切さに対する理解の深化」、そして「自らの健康を適切に管理するとともに、がん予防や早期発見につながる行動変容を促す」ことが成果として現れることを期待している。

学校における健康教育においては、生涯にわたって自分や周りの人の健康課題を自覚し、その課題を解決するために必要な意思決定や行動選択等ができるように、児童生徒の発達段階に応じた実践力等の資質や能力及び態度を育てることが大切である。がんの教育をすすめる上でも、これらのことを踏まえ、学校全体で共通理解を図り、さらに保護者にも理解を得ながら実施していくことが大切である。がんの教育については、まだ市内では実践が少ない指導内容であることから、まずは課題とされることを探り、また、がんの教育の進め方としてどのようなアプローチが考えられるか研究したいと考えた。児童生徒ががんに対する正しい知識を身に付け、自らの健康を適切に管理していくことを目指し、がんの予防や早期発見につながる行動変容を促すような保健指導を考えることとした。

II 研究の内容

1 研究の方法

(1) 事前調査の実施

研究員の各校において、児童生徒を対象に、がんに対するイメージや知識について調査を実施し、課題となることを分析した。また、教職員にも調査を実施し、がんの教育に対する考え方や課題とされることを分析した。

(2) 効果的な指導内容や方法の検討

文献や先行研究の調査と収集を行い、健康教育の視点で指導内容や方法を検討した。

(3) 授業モデルの作成

実態調査の分析結果をもとに、教職員が取り組みやすく、子どもたちの発達段階を踏まえた保健指導の授業モデルを作成した。

(4) 検証授業の実践

研究会議で作成した授業モデルを研究員が所属する3校（小学校1校・中学校2校）で検証した。

(5) 検証授業の結果のまとめ

授業時・授業後のワークシートの記述の内容を整理し、分析した。

(6) 検証授業後の実態把握

検証授業後に、再度調査を行い、児童生徒の変容を見取った。また、教職員に対しても再度調査を行い、授業前後のがんの保健指導に対する考え方の変容を見取り、がんについての授業に対する課題を検証した。

2 事前調査の結果

研究員所属校の児童生徒を対象にアンケート調査を実施し、がんに対するイメージや知識などについて実態を把握することとした。調査内容は【表1】のとおりである。

「がんはこわい病気だと思う」という問いに対して、「そう思う」と答えた率は小学校・中学校ともに90%を超えた。児童生徒にとって、がんは「こわい病気」であると認識していることがわかる。

一方、「がんは日本人の死亡原因の第1位である」という質問に対しての正答率は、小学校、中学校ともに50%未満、がんは生活習慣に関わっている病気であることに関連している質問の正答率は70~80%であった。保健学習で既習している内容であるが、知識として身に付いていない実態があった。がんに対しての不安や恐怖は抱いているが、正しい知識をもたないまま、漠然と「こわい病気」だと感じている児童生徒が多いことがわかる。

また、「がんは誰もがかかる可能性がある病気である」という質問の正答率は70%を超えたが、「現在日本人ががんになる可能性は2人に1人ぐらいといわれている」という質問に対しての正答率は約20%と低い。「がんは身近な病気だと思う」という質問に対して「そう思う」と回答した率は小学校で約60%、中学校では2校平均で約40%であった。がんは「こわい病気」であり、自分もかかる可能性があると思っけていても、がんを身近な問題と捉えている児童生徒の割合は低い。

【表1】アンケート調査内容		②がんに対する知識・理解についての質問 (抜粋)	
調査学年・人数		①がんに対するイメージや関心等についての質問	
小学校	6年生 142名	①「そう思う」「そう思わない」「わからない」で回答	
中学校A校	2年生 102名	②「正解」「不正解」「わからない」で回答	
B校	2年生 394名		
項目	項目	項目	項目
1	がんは身近な病気だと思う	1	がんは日本人の死因第1位である
2	がんはこわい病気だと思う	2	現在日本人ががんになる可能性は2人に1人ぐらいといわれている
3	がんになったら治らないと思う	3	がんは体の中で異常な細胞が増える病気である
4	将来がんの検査を受けようと思う	4	がんは生まれもった体質のみで起こる病気である
5	がんについて知りたいと思う	5	がんは誰もがかかる可能性のある病気である
6	がんを勉強することでがんになった人の気持ちを考え、優しくできると思う (中学校：がん患者への理解が深まると思う)	6 小学校	a がんの原因として、食事や運動などの生活習慣は関係しない
7	家族や身近な人とがんについて話し合おうと思う	b がんの原因として、たばこやお酒が関係する	
8	がんになっても病気と付き合いながら充実した生活が送れると思う	6 中学校	がんを予防するためには、たばこを吸わないこと、バランスよく食事をする、適度な運動をするなどの方法がある
		7	がんの早期発見には検診が大切である (中学校：不可欠である)
		8	がんを予防するにはワクチンを受けるなどの方法がある

3 授業モデルの作成ポイント

アンケート調査の結果をふまえ、次のことを協議し、授業モデルを作成した。

(1) 指導内容および対象学年の検討

児童生徒の実態から、がんに対する正しい知識を学ぶだけではなく、がんという病気を通して望ましい生活習慣を身に付け、生涯にわたり自らの健康を適切に管理するための実践力も育てたいと考え、特別活動の学級活動(2)の内容を検討することにした。

対象学年については、小学校においては、保健学習「病気の予防」に関連させ、保健学習の既習事項を生かす指導として6年生に実施することとした。中学校においては、保健学習「健康な生活と疾病の予防」を学習する3年生で行うことが望ましいと考えたが、高校受験の時期等の学校事情により、理科で各臓器の働きを学習した後の2年生で実施することにした。

(2) 教材の工夫

がんの授業実践はどの教師にとっても初めての実践となる。教師にとって使いやすく、誰でも取り組めるような教材、また子どもたちががんという病気の理解を深め、関心をもてるような教材について、検討を重ね工夫した。

(3) 学年・学級担任との連携

小学校では養護教諭の専門性を生かした指導方法と教材研究を行い、中学校では学級担任が授業を行うため、どの学級でも担任が指導しやすい指導方法と教材研究を行った。小学校、中学校ともに具体的な活動とねらいを学級担任や学年と十分に話し合い、共通理解を図った。

4 検証授業

(1) 小学校

- ①実施校 研究員所属小学校
- ②対象者 小学校6年生
- ③時期 平成26年12月
- ④実施内容 特別活動 学級活動 (2) 日常生活や学習への適応及び安全
カ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成
- ⑤授業者 養護教諭
- ⑥授業の実際
○題材名 「がんについて学ぼう」
(2) — カ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成

○評価規準

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団や社会の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
自分の健康について関心を持ち、日常生活における健康の問題を見つけようとするともに、日常生活を安全に過ごそうとしている。	日常生活における自分の健康の問題を見つけ、健康維持促進に必要な事柄を考えて実践するとともに、安全を保つために決まりを守って行動している。	心身の健康を高める生活の仕方を理解するとともに、日常生活を安全に保つために必要な事柄を理解している。

○事前の活動

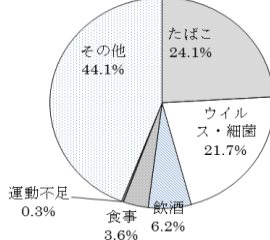
活動の時期	児童の活動	評価(☆)と支援(○)	資料
7月	・がんの教育に関するアンケートの実施	○がんの授業することを伝え、授業をするにあたって不安なことがあったら担任や養護教諭に伝えるように言う。	がんの教育に関するアンケート

○本時のねらい

- ①がんという病気について正しく理解する。
- ②がんを予防するために自分でできそうなことを考え、実践しようとしている。

○本時の展開

	児童の活動	評価(☆)と支援(○)	資料
導 入	1, 本時の学習内容について確認する。 ○生活習慣と深く関係している病気にはどのようなものがあったかクイズをする。 ・心臓病・脳卒中・がん ・高血圧症・糖尿病 ○「がん」について学習することを確認する。	○保健学習で学んだ、生活習慣と深く関係している病気にはどのような病気あったかクイズをしながら思い出させ、その一つである「がん」についての正しい知識と予防方法について学習することを確認させる。	・スライド「保健学習の教科書」
展 開	2, がんという病気について正しく理解する。 ○がんはどんな病気かスライドで学習する。 ・日本人の死亡原因の第1位。 ・現在日本人の2人に1人がかかる。 ・がんは体の中で異常な細胞が増える病気。 3, 日本におけるがん死亡の原因について考える。 ○異常な細胞ができる原因について班で話し合い、短冊に記入する。班ごとに黒板に貼り発表する。 ・たばこを吸う ・食事のかたより(塩分をとりすぎる、野菜・果物不足、熱い飲食物) ・運動不足 ・お酒の飲みすぎ ・ウイルス・細菌	○スライドを使用し、がんとはどのような病気か視覚的に学習させる。 ○がんは誰もがかかる可能性のある病気、異常な細胞が増える病気であることをおさえる。 ☆がんという病気について正しく理解する。 (集団活動や生活についての知識・理解) ○異常な細胞ができるのは日常生活習慣と深く関係していることをおさえる。 ○児童が発表した原因を、円グラフを使用しどこに当てはまるのか意見を聞きながら整理する。 ○たばこやお酒、食事など日常生活習慣と関わりが深い病気であることをおさえる。 ○死亡原因の円グラフから、ウイルス・細菌でなるがんもあることを知らせる。インフルエンザやかぜとは違い、日常生活では感染しないことをおさえる。 ☆がんという病気に関心を持ち、進んで話し合い活動に参加する。(集団活動や生活への関心・意欲・態度)	・スライド ・短冊(各班5枚) ・マジック ・円グラフ「日本におけるがん死亡の原因」 (グラフの出典: 国立がん研究センターがん予防・検診研究センター『がん死の要因別PAF』2005年)



	4, 「がん検診」について知る。 ○川崎市から届いた封筒が何かを考える。 ・がん検診	○がんの予防方法でみんなが出来ることは、正しい生活習慣だが、それでもがんになる危険性はあること、がんは初期であると自覚症状が何もない場合が多いことをおさえる。 ○封筒を使用しがん検診について知らせる。早い段階で見つけ、早く治療をすることでがんは治る可能性が高くなるため、検診が必要なことを理解させる。	・封筒「がん検診無料クーポン」
終末	5, 学習内容をまとめる。 ○今日の学習から、自分の生活を振り返り、がんを予防するために自分でできそうなことを書く。 ・たばこを吸わない ・バランスのよい食事 ・塩分をとりすぎない ・適度な運動 ・お酒を飲みすぎない ・がん検診の受診	○がんを予防するためにはどのようなことに気をつけて生活していけばよいか、今日学習したことを振り返り書かせる。 ☆がん予防には生活習慣が関係していること、がん検診の必要性について理解し、自分でできそうな目標を立てている。 (社会の一員としての思考・判断・実践)	・ワークシート

○事後の活動

活動の時期	児童の活動	評価(☆)と支援(○)	資料
授業後	・がんの教育に関するアンケートの実施 ・授業の感想を書く	☆健康を守るためにがんの予防方法について自分でできることを考え、判断し実践している。 (集団の一員としての思考・判断・実践)	がんの教育に関するアンケート

(2) 中学校

- ①実施校 研究員所属中学校 2校
- ②対象者 中学校2年生
- ③時期 平成26年11月、12月
- ④実施内容 特別活動 学級活動(2) 適応と成長及び健康安全
キ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成
- ⑤授業者 学級担任
- ⑥授業の実際 「がんについて考えよう! ~健康によりよく生きるために~」
(2) — キ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成

○評価規準

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団や社会の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
自分の生活を振り返り、心身ともに健康で安全な生活態度や習慣について考えようとしている。	心身ともに健康で安全な生活態度や習慣を身につけるためにはどのようにすればよいか考え、実践している。	健康で安全な生活を送ることの大切さや実践の仕方について理解している。

○事前の活動

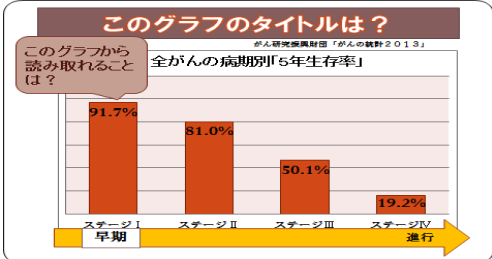
活動の時期	生徒の活動	教師の指導(・) 評価(◎)
9月	○がんの教育に関わるアンケートの実施	・授業の主旨を伝え、自らの健康な生活に大きく影響を与える問題だということを伝える。

○本時のねらい

- ・がんの予防や早期発見の必要性などについて、正しい知識を身に付ける。
- ・がんを予防するためには、中学生の時期から健康に関心を持ち、正しい知識を身に付けることが大切だと気づき、自分の健康を守るためによりよい解決方法を考え、判断し、実践しようとしている。

○本時の展開

	生徒の活動	教師の指導(・) 評価(◎)
導入	○本時の学習内容を知る。 アンケートの結果について紹介する。 (授業前の生徒たちの知識の習得度→がん発生の確率)	◎アンケート結果について関心をもっている。 ・がんは、2人に1人がかかる可能性のある身近な病気であることを確認する。
展開	○がん闘病者 横山さんの手記を紹介する。 ○本日の学習の内容について知る。	◎がんを身近の問題ととらえ、がんの予防・早期発見の必要性などについて興味・関心をもっている。(集団活動や生活についての関心・意欲・態度) ・がん闘病者 横山さんの手記を読む。 ・手記の中の「がんという病気がどんなものかよくわからず」「検査に行きませんでした」「治らないのではないか」という言葉から、生徒に身近な問題としてがんについて考えさせる。
	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px auto; width: fit-content;">がんのことを正しく知ろう!</div> <p>○がんの基礎知識について学習する。</p> <p><u>キーワード①</u> がんという病気がどんなものか、よくわからず</p> <p>・がんは、異常な細胞が増殖する病気であることを知る。</p>	◎がんの予防や早期発見の必要性などについて、正しい知識を身に付けている。(集団活動や生活についての知識・理解)

展 開	<p>キーワード② 大腸がん・肝がん</p> <ul style="list-style-type: none"> 大腸がん・肝がんの主な原因について知る。 様々ながんの原因について知り、生活習慣との関連が深いことを理解する。 小児がんについて知る。 	<ul style="list-style-type: none"> がんがどのような病気かイメージをもちやすいように、スライドで視覚的情報を用いて説明する。項目ごとにポイントをおさえ、ワークシートに記入させる。 生徒の意見を黒板に書き出し、がんの原因には、主に生活習慣が関係するものと、生活習慣（ウイルス感染など）が関係しないものがあることを確認する。また、小児がんについては原因がわかっていないことを説明する。 子宮がんワクチンについては今回は触れない。
終 末	<p>★ワークシートのⅠ-①②を学習内容を思い出しながら記入する。 ★ワークシートⅠ-③の「今できること」「大人になった時にできること」を自分の生活を振り返りながら記入する。 (がんの一次予防に対する個人目標)</p> <p>キーワード③ 検査に行きませんでした 治らないのではないか</p> <ul style="list-style-type: none"> がんが増殖するには時間がかかること、また症状が現れる前に定期的に検診を受けることが大切であることを知る。 <p><グループ学習 ワークシートⅡ-①></p> <ul style="list-style-type: none"> ★このグラフのタイトルについて考える。 (グラフのタイトル：全がんの病期別5年生存率) ★このグラフから読み取れることをグループで話し合う。 ★ワークシートⅡ-②の検診の大切さや自分がどのように行動したいのかを記入する。 	<p>◎がんを予防するためには、中学生の時期から健康に関心をもち、正しい知識を身につけることが大切だと気づき、自分の健康を守るために、よりよい解決方法を考え、判断し、実践しようとしている。(集団や社会の一員としての思考・判断・実践)</p> <ul style="list-style-type: none"> 話し合い活動の体制にさせる。 ★グラフのデータを段階的に紹介し、このグラフのタイトルを生徒たちに考えさせる。 ★データを一緒に確認し、早期に発見すれば今の医療では9割近くが治る可能性が高いこと、そして早期に発見するためには、定期的に検診を受けることが大切であることを確認する。また、教グループに発表させる。 <p>(グラフの出典：がん研究振興財団 「がんの統計 2013」 『全がんの病期別「5年生存率」』)</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークシートⅡ-②に記入したことを数名に発表させる。
終 末	<p>○本時の学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 望ましい行動をするためには、正しい知識がないと行動につながらないことを確認する。 今日学習した内容については、家族と話し合ってもらいたいことを伝える。

○事後の活動

活動の場面	生徒・保護者の活動	教師の指導(・) 評価(◎)
各家庭・日常生活	○学年だより・保健だより等で授業を振り返る。	◎授業を振り返り、自分の立てためあてを実践しようとしている。(集団や社会の一員としての思考・判断・実践) ・学年だよりや保健だより等で授業の様子を紹介し、各家庭においてもがんについて関心をもってもらう。

使用した手記

私は、元プロ野球選手でした。皆さんがよく知っている読売巨人軍のピッチャーとして、ドラフト1位で入団しました。7年間、夢だった、プロ野球のピッチャーとして頑張りました。私が、がんになったのは、プロ野球選手を引退したおよそ20年後のことでした。

私は、今までに、3つのがんにかかり、4年間、治療をしました。

最初のがんは、②大腸がんでした。実は、大腸がんになる2年前に受けた健康診断で大腸ポリープ(★)というものが見つかりました。お医者さんからは、「これからは、半年に1度、検査を受けた方がいいですよ」と言われていました。でも、私は、そのとき、お店の仕事をしていました。お店の仕事を休めなかったし、何よりも、病院にわざわざ行って、検査を受けるのが苦痛だったので、③検査に行きませんでした。その後、「あなたは、大腸がんですよ」とお医者さんに言われた時は、とても、ショックでした。①がんという病気がどんなものか、よくわからず、「もしかしら、③治らないのではないかと悪い方ばかり考えて、気持ちが暗く沈むばかりでした。～ 一部中略 ～

ワークシート(概要)

がんについて考えよう

- Ⅰ. がんという病気とがんの原因について学習し、自分の生活を振り返ろう！
 - ① がんはどんな病気？
がんは、()な()が増殖する病気
 - ② がんの原因にはどんなものがありますか？
 - ③ 自分の生活を振り返って、がんを予防するために今できることや、大人になった時にできることを記入しましょう。
- Ⅱ. がんと早期発見
 - ① このグラフのタイトルは？
また、このグラフから読み取れることは？
 - ② 検診の大切さについて、また自分がどのように行動したいか記入しよう。

5 検証授業の評価

(1) ワークシートの分析

小学校では、本時の終末でがんの予防方法について記入する際、生活習慣とがん検診の2つについて多くの児童が記述できていた。授業のねらいである「がんについて正しく理解する」ことに関連した記述や、予防方法として生活習慣を整えることや、検診を受けることが大切であるという具体的な

記述もみられた。また、授業後に家族に喫煙を止めるように伝えたり、がん検診の無料クーポンが届いているか確認したりする児童もいた。

中学校では、大多数の生徒が生活習慣について何をどう改善するのかを具体的に記入していた。授業で学んだことだけでなく、普段の生活を振り返って、自分の生活の問題点から今できることを考えられた生徒も多かった。具体的にできることが書けなくても、「今のうちからがんについて知っておくことが大事である」と記入している生徒も見られた。

これらのことから、小学校・中学校ともに、指導のねらいはおおむね達成したと思われる。

課題は、がんの予防方法の記述に「うがい・手洗い」と書く児童生徒が数名みられたことである。授業では、小学校・中学校ともに、細菌やウイルスが原因のがんの予防方法はインフルエンザのような感染症の予防方法とは違うことを説明したが、それだけでは児童生徒の理解が不十分であった。がんの原因は生活習慣に関わるものだけではないことをおさえるのであれば、細菌やウイルスが原因のがんについて触れ、その予防についてよりわかりやすい説明をする必要がある。

(2) 授業前後のアンケート調査結果の分析

授業前後のアンケート調査の結果から、児童生徒の変容について次のように考察した。

①がんに対する知識の変容

授業の中で扱ったがんの知識を問う質問については、授業後の正答率が90%近かった。知識理解の部分については、ねらいはほぼ達成できたと考える。

②がんに対するこわさの変容

授業の前の調査で、「がんはこわい病気である」と回答した率が90%を超えていたが、授業後もその率に変化がみられなかった。授業後の調査で、正しい知識と理解についての質問の正答率が大幅に増加したことから、がんはこわい病気であることには変わりはないが、学習することで「漠然としたこわさ」から「理解した上でのこわさ」に質が変わったと思われる。

③がんに対する興味・関心についての変容

授業後のアンケート調査の結果から、「がんは身近な病気だと思う」「がん検診を受けようと思う」と答えた率は授業後に増加した。しかし、「がんについて知りたい」と答えた率は授業前後で変化はそれほどみられなかった。これらの結果から、今回の授業では、児童生徒はがんは身近な問題であり予防や検診が大切であるということを感じ取ることはできたが、がんという病気そのものに対する興味・関心までは高めることはできなかったと考えられる。

6 教職員の意識調査

指導を行う教職員が、がんの授業に対してどのようなことを課題としているか調査した。検証授業前後に調査を行い、授業前の調査からみえた課題は指導案作成に生かした。授業後の調査結果からは、教職員の意識の変容が見られたか分析した。

授業実施後の意識の変容

「がんの教育を必要だと思いますか」「がんの教育は児童生徒のこれからの生活に役に立つと思いますか」「がんの教育は児童生徒が興味・関心をもって学習できると思いますか」という質問について、授業実施後に「そう思う・ややそう思う」と答えた率が増加した。授業の実践を通し、がんの教育のねらいを教員が理解し、実際に指導した際の児童生徒の様子やワークシートの記入内容を評価することで、小学生・中学生に対するがんの教育の意義を理解したためと考えられる。

「がんの教育の授業にあたって、困難さを感じますか。」という質問については、「そう思う」と答えた率を授業後に若干減らすことができたが、それほどの変容はみられなかった。困難さを感じる原因として多く見られたのは「自分の知識不足」「生徒の実態」、次に「教材の不足」であった。これらの困難さを感じる原因については、授業後の担任との協議の中でも今後の課題としてあがっている。教員自身ががんの教育の意義や目的を理解し、児童生徒の実態にあった指導を計画的に実施することができるように、指導体制を整えることが大切である。

Ⅲ 研究のまとめ

がんに対する基本的な知識を学び、自らの健康を適切に管理できる子どもの育成をめざして、学校におけるがんの教育の方向性や課題、また養護教諭としてどのように関わることが望ましいのかを検討し、研究を進めてきた。研究のまとめとして次の点について整理した。

1 がんについての授業の実施機会について

検証授業では、特別活動の1時間で知識理解の学習と実践的な活動を取り入れた。しかし、がんに対する予備知識がほとんどないため、知識の習得が中心の授業になってしまった。

理想としては、がんについての知識・理解の学習は体育（保健分野）や保健体育等で1時間学習し、その後に特別活動等で児童生徒たちの行動変容を促すような活動を1時間行うことが望ましいと考える。

2 がんについての授業の実施学年について

小学校においては、保健学習「病気の予防」を学習した後に、授業を行った。児童の授業での反応、アンケート結果からみえた知識の習得度から、6年生でもがんの発生の仕組みや原因を学習することは可能であると考え。小学校で実施するのであれば、発達段階に合わせた学習内容と、保健学習で「病気の予防」について学習した後のほうが望ましいと考える。

中学校においては、今回は2年生で授業を実施したが、がんの原因の一つであるウイルス・細菌感染についての理解が難しかった結果を踏まえると、3年生の保健学習「健康な生活と疾病の予防」を学習した後のほうが、授業の実施時期としては望ましいと考える。

3 がんについての授業の学習内容について

検証授業の評価から、小学校・中学校における授業の学習内容について次のように考察した。

小学校においては、「がんの発生の仕組み」や「がんは生活習慣と深く関係している病気であり、原因は様々なものがある」という学習内容であれば、児童は十分に理解できると考える。

中学校においては、がんの原因については、さらに踏み込んで「がんの原因には、生活習慣とそれ以外（ウイルス・細菌感染や生まれつきの性質）の原因がある」という内容まで理解できると考える。

また、中学校においては、がんそのものにならないための予防（1次予防）と、早期発見をしてがんの進行を防ぐための予防（2次予防）があることを知り、そのための手段として検診の果たす役割が大きいことも学習することが望ましいと考える。ただし、小学校・中学校においては、今から取り組める1次予防のことをしっかりおさえた上で、2次予防を指導することが大切であると考え。

子どもたちは、予想以上にがんの原因や種類を知っていた。それだけに、正しい知識を小学校・中学校のうちから知っておくことは、とても大切なことである。がんに対する基本的な知識を習得させることは、自らの健康を適切に管理するという実践力にも結びつくものである。今後は児童生徒ががんについて、さらに興味や関心をもてるように、指導内容や方法を工夫していくことが必要であると考え。

4 教材について

教職員への調査で、がんについての授業にあたって困難さを感じる原因の1つに「教材の不足」があげられた。既存の教材はまだ少なく、今後開発していく必要があると考える。

今回の中学校の検証授業では、学級担任が取り組みやすい授業にするために、使いやすいスライドの教材とそれに合わせて説明する台本を作成した。特に専門的な知識の箇所については事前にスライドの内容を確認し、よく把握してから実践するように話し合った。各担任が同じ内容で指導できるようにするためにも、誰もが使いやすい教材の準備が必要であると考え。

また、今回の小学校の検証授業で使用した「日本におけるがん死亡の原因」のグラフのように、日本の実態に合わせた資料を提示すると、説得力があり、児童も身近に感じやすいと考える。情報を読み取る活動は、子どもの思考をのばす大切な活動であると思われるので、教材を開発するためには、適切なデータを収集することが大切である。

そして、児童生徒ががんを身近な問題として捉えられるような、がん患者の体験談などの教材も有効である。その際、児童生徒ががんを予防し、将来どのように生活していけば健康に過ごすことができるのかを考えさせる情報が入っていることが望ましい。

5 授業者について

学級担任はクラスの児童生徒の状況をよく理解しており、発問や内容などについても的確な判断ができ、学級活動における健康教育が学年一斉に展開できる。ただし、事前にがんについての知識や授業のねらいを十分理解した上で実施する必要があるため、養護教諭ががんの知識の部分を指導したり、保健体育等で行う生活習慣病の指導の時期と合わせたりするなどの工夫が必要である。

養護教諭が単独で授業する場合は、がんの原因について専門知識を生かしながら児童にわかりやすく説明し、授業後の個別指導につなげていくこともできる。ただし、クラスの実態を十分に把握できていないため、話し合い活動等の進め方等、事前に担任と十分な連携を図る必要があると考える。

6 養護教諭のがんの教育への関わりについて

養護教諭は健康教育を推進する立場として、がんの教育への関わり方は様々な方法があると考えられる。今回、小学校では養護教諭が授業を行ったが、授業実践することだけが関わりではなく、中学校のように、指導案作成や教材開発の点から養護教諭としての専門的視点で意見を述べることも大切だと考える。また、児童生徒の実態把握、資料提供、配慮が必要なケースへの個別対応なども養護教諭として関わる必要があるように思う。今後は、医療や福祉とも連携してがんの教育を進めていくことも想定され、関係機関と連携していくという役割も考えられる。

今後、がんの教育をすすめるにあたり、学校全体の理解と協力のもと実施できるように、養護教諭としての専門的視点や意見を持ち、関わっていくことが重要である。

7 配慮が必要なケースへの対応について

日本においてがんが生涯のうち2人に1人がかかる病気であることを考えると、本人・家族ががん患者であるというケースが存在することを予想した対応が必要になってくる。

教職員の意識調査では、がんの教育の困難さの原因に「生徒の実態」と回答する教職員が授業前後ともに約30%存在し、授業終了後の教職員の意見・感想においても配慮を要するケースへの対応の難しさを記述している教職員が多かった。これについては、今後がんの教育を進めていく上で、大変大きな課題であると考えられる。

今回の検証授業においては、保護者には事前に文書で授業実施のお知らせを配付し、そこに相談窓口を明記した。そして、配慮が必要なケースについては、個別に授業の趣旨と内容を説明し、どのような形で授業を受けるかを話し合った。一人でも心配な児童生徒がいる場合は、家族と連携を密にして、授業の実施や内容について検討することが大切である。学校は様々なケースがあることを想定して、児童生徒の状況を十分に把握する必要があると考える。

がんの教育を進めていく上では様々な課題があるものの、がんは死因の第1位であり、2人に1人ががんにかかる可能性があるという日本の状況を踏まえると、小学生・中学生のうちからがんという病気を正しく理解することはとても大切なことと考える。

児童生徒が、がんについての授業を通して自らの健康について考え、望ましい生活習慣を身に付けていくことを期待している。

最後に、本研究を進めるにあたり、ご指導、ご助言をいただいた先生方、また、研究をご支援していただいた研究員所属校の校長先生をはじめ、教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・東大病院放射線科准教授 中川恵一
「がん教育」について DVD『がんって、なに?』のご指導に当たられる先生方へ 2013年
- ・豊島区教育委員会 「がんに関する教育」小学校指導の手引き
- ・がんの教育に関する検討委員会 「がんの教育に関する検討委員会報告書」 2014年
- ・「がんのことをもっと知ろう」編集委員会（編集）
国立がんセンターがん対策情報センターがん情報・統計部（企画・発行）
『小学校健康教育資料 生活習慣病のひとつ がんのことをもっと知ろう』
- ・国立がん研究センターがん予防・検診研究センター「日本におけるがんの原因」
『がん死の要因別 PAF』2005年
- ・がん研究振興財団 「がんの統計2013」 『全がんの病期別「5年生存率」』

【指導助言者】

聖心女子大学教授（川崎市総合教育センター専門員） 植田 誠治